

満月に 何かが起こる

FULL MOON Peleliu

～ 狙うは、バラフェダイの大産卵、5000匹のロウニンアジ ～

今年もペリリューのダイビングシーズンがやってきた。
デイドリームがペリリューステーションをオープンさせてから、すでに5年。
その間、彼らはこの海で、多くの革命的なリサーチを行ってきた。
その凄さは、この不況下でありながらも、来シーズンの予約が殺到していることから伺い知れる。
今回はその凄さの一つ、満月に見れる衝撃的シーンを中心に特集を組んでみた。
そう、この海では、満月に間違いなく何かが起こる！

Photo & Text Takaji Ochi

Special Thanks Day Dream Peleliu Station

Design Sana☆

バラフェダイ追い込み隊によって、ペリリューコーナーの先端まで追い込まれたバラフェダイの群れ

Palau. PELELIU Island
Web-lue 2009. Autumn



Information Link
<http://www.daydream.to/peleliu/>

click! 関連情報HPへ



01



02

衝撃のバラフェダイ、大産卵シーンへ



03

朝 5時15分、周囲はまだ暗闇に包まれている。ゲストは、ポロボロのバンにピックアップされて、ジャングルの間を縫う道路をキャンベックの港へと向かう。「おはようございま〜す」とスタッフと挨拶は交わすものの、ほとんど皆が無口なまま車内に乗り込んでくる。不機嫌そうにも見えるけど、ただ眠いだけに違いない。もしくは、これから見られるであろう、衝撃のシーンを前に緊張している者もいるのかもしれない。

港までの約15分の移動の車内の中で、少しでも眠っておこうと、僕は静かに目を閉じる。港に着くと、群がるサンドフライから逃れるように、慌ただしくタンクと機材をポートに積み込んで、速やかに港の外へと逃げるように出航する。サンドフライ地獄から逃れると、今度はバラフェダイの産卵という一大イベントをいかに撮影するかに、気持ちを集中させながら、カメラのセッティングを再確認する。

満 月が、西の空の水平線上に沈み、東の空が白みはじめる。しばらくはポート上で明るくなるのを待ち、6時過ぎのタイミングで、ペリリューコーナー側からエントリーを開始した。昨日までの抜けるような青い海は無く、薄明かりの中、まるで海中で煙幕でもたかれたかのような白濁したにごりで、目の前にははずのリーフエッジがまったく見えない。

白濁した海水の合間から、激しく昇り立つ、魚の塊がチラチラと見え隠れる。バラフェダイの放精放卵はすでに始まっていた。水中カメラハウジングを握りしめる手に力が入る。

コーナーの先端のブルーウォーターで、激しいバトルが展開されているようなシーンが、帯状に広がっている。そこに、カマストガリザメやブルシャークが、突っ込んで行くのが見える。身体がにわかに緊張する。

群 れの状態を凝視しながらも、ガイドの遠藤さんや森君（今は石垣島のうなりぎきで働いている）らとのアイコンタクトを忘れないように、二人の水中での行動にときおり目をやる。「突撃許可」のサインが出たら、一気に群れに近づくとつもりでいた。

新月前に行われるイレズミフェダイの産卵は、何度も取材しているから、ある程度群れがどのように動くかの予測はついた。しかし、バラフェダイの産卵メインで取材に訪れたのは、今回が初めてのことだったから、状況を把握しているガイドたちの指示には絶対的な信頼を置いて、撮影に挑むことにした。

01/ 頭上を取り巻く5000匹のロウニンアジも満月時期の見所の一つ

02/ 産卵開始前に、リーフ上で一つの塊となって、うごめくバラフェダイの群れ

03/ 白濁した濁りの中で、バラフェダイたちの大産卵が開始される

満月に、何が起る
FULL MOON Peleliu
～ 狙うは、バラフェダイの大産卵、5000匹のロウニンアジ～



満月の、大産卵を前にバラフエダイの群れは、ベリリュウカット周辺に5000匹以上の群れを作る。イレズミフエダイの14万匹に比べると、数はとても少なく感じるが、リーフの外側に巨大なボール状に密集するバラフエダイの群れは、流れる川のように群れるイレズミフエダイとはまた違った迫力を感じる。

イレズミフエダイのときもそうだったのだけど、ベリリュウで群れを撮影するときには、ガイドとの協力だけでなく、そこに一緒にいるゲストダイバーの協力を得ることも、良い写真を撮影するための重要条件になる。「撮影の邪魔をしないで」ということではなく、ともしれば、接近することで、いとも簡単にばらけてしまう群れを、いかに全員で囲んで、取り囲み撮影するかという作戦を立てる。

誰かが先走ったり、誰かが出遅れば、そこで群れはばらけてしまう。一緒にいるダイバー全員のチームワークが重要になるために、潜る前から親睦を深め、入念な打ち合わせをする必要がある。そんなことが必要な海なんて、他では多分ありえない。

激流のベリリュウにあって、そんなチームワークで群れを追い込む楽しさを味わえるのも、またデイドリームベリリュウステーションで潜る「価値」の一つではないかと思う。

今回は、カットにいる群れを全員でコーナーの先端に追い込み、ロウニンアジの群れとのコラボレーションを完成させることまでやってのけた。

「あなたとあなたは、リーフサイドから、あなたは、群れの下側、あなたは上、あなたたちは、ブルーウォーター側に列を作って、群れを取りこぼさないようにしてください。僕が群れの真後ろで指揮を取ります」みたいな感じで、ガイドの遠藤さんの指示の元、チーム編成が行われ、群れを追い込んでゆく。

皆の気持ちが一つになって、群れをコーナー先端へと追い込み、そこにロウニンアジの群れが突っ込んでくる。作戦成功！皆で力を合わせて、バラフエダイとロウニンアジのコラボレーションが完成させたときの達成感は、あまり通常のダイビングでは味わえない楽しさだ。



バラフエダイ追い込み隊結成！大産卵へ突入！！

- 01/いざ、バラフエダイの群れの待つベリリュウカットへとエントリー
- 02/ドロップオフ沿いを慎重に進んで行く
- 03/バラフエダイの群れを発見、まずは驚かさぬように、ドロップオフに沿って接近
- 04/先端までの追い込みが完成し、ロウニンアジの群れとバラフエダイの群れがコラボする
- 05/その後、ロウニンアジの群れにもまかれる

白濁した海中では、バラフエダイたちによる必死の放精、放卵が行われていて、それは帯状になって、どこまでも連なっているようだ。そこに向かって、海中深くから、ブルシャークやカマストガリザメが猛アタックをしかける。

辺りは、ダイバーのことなど気にしている暇などない、必死の生存競争が繰り広げられている。

遠藤さんから、「突撃許可」のサインが出された。流れも強くなか、ダイバーたちは一斉にリーフから離れ、ブルーウォーターで繰り広げられる大産卵に接近を開始する。

その間も足下から、腹を空かせたサメたちのアタックが、こちらに向かってこないかに気を集中させる。近づきたい

ような、近づいて欲しくないような。足下が無防備なほど、気分の悪いものはない。

バラフエダイも、サメも、そしてダイバーも大興奮状態の約20分間。無我夢中で撮影を続けた。撮影に必要な冷静さを保つことは、困難なことだった。

満月に何かが起こる
FULL MOON Peleliu
～ 狙うは、バラフエダイの大産卵、5000匹のロウニンアジ～

満月のバラフェダイ、新月のイレズミフェダイ

満月に、何かが起こる
FULL MOON Peleliu
～ 狙うは、バラフェダイの大産卵、5000匹のロウニンアジ～

バ ラフェダイの産卵は、1年中確認されている。満月の数日前から、ペリリュークット、イエローウォールに集まり始めて、産卵を行うピークは、満月とその翌日くらい。多いときには1万匹くらいの大産卵になるという。

イレズミフェダイは、3月、4月、5月（新月が2月後半なら2月から）の新月前の半月くらいから、産卵を行い始める。しかも、産卵期間がバラフェダイに比べて長い。産卵方法の違いは、イレズミフェダイは最初リーフの棚上で開始して、その後ブルーウォーターに移動しながら産卵を行い続けるのに対して、バラフェダイの産卵は、最初から最後までブルーウォーターで行う。

それにしても、こんな大イベントが新月にも、満月にも待ち受けているなんて、どんだけ凄いな、ペリリュースは！しかし、バラフェダイやイレズミフェダイだけじゃないのが、ペリリュースの凄ところだ。次はロウニンアジの話しよう。

ペリリュークットに群れるバラフェダイの壁に果敢に突っ込んでいくかのように見えるウミガメ。幻想的なシーンだった

リリーフコーナー先端のリーフトップに留まりながら、僕は頭上にあふれかえった、5000匹を優に超えるロウニンアジの群れを見上げていた。「満月回りのロウニンアジの群れは凄い!」とは聞いていたけど、まさかこれほどの違いがあるとは。

違いというのは、新月回りでのロウニンアジの群れの規模と近寄りやすさだ。今までの取材では、新月回りのイレズミブエダイの群れ狙いだった。それはそれで、豪快で面白いのだけど、実はロウニンアジの群れは、あまり深場から上がって来ないし、群れの規模も満月のそれとは比較にならない。

だから、どちらかと言えば30mのリーフより下でロウニンアジの群れを撮影することの方が多かった。それに、規模的にも、満月時期のおよそ10分の1程度になる。といっても、500匹くらいの群れだから、初めて見たときは壮観だった。しかし、満月の群れは壮観とかそういうレベルではない。

リーフトップに居ながらにして頭上をロウニンアジの大軍団に取り囲まれたときの興奮は、経験したものでなければわからない。このロウニンアジの群れが見たければ、満月前後のトータル1週間くらいが狙い目になる。

頭上にあふれかえった、5000匹のロウニンアジ。圧巻だ

ロウニンアジは満月が狙い目!



さらに南へ、アンガウル島を目指す  癒しの海、癒しの島へ



- 01/ アンガウル島南端、サンドガーデンの広がる海
- 02/ 島内唯一のメインストリートには、美しいハイビスカスが咲き誇る
- 03/ 島の奥深く踏み込むと、ジブリの森のような風景に出会える
- 04/ 港の建物に描かれている海の生き物の絵。ジュゴンの姿も見える



03/ コモンシコロサングの大群落も見物の1つ
04/ サングのトップに群れる、ハナダイたち



リリュー島からボートで約30分南にあるのがアンガウル島。資料では、人口150人となっているが、実際には58人が暮らす（今はまた変動してるかも）、小さな島だ。この島の周辺にも、ダイビングポイントが点在していて、コンディションの良い日など、希望があればダイビングに訪れることもある。しかし、シーズン中に行くのはせいぜい10回くらいだという。遠藤さんとしては、「もっと遠征したい」場所だ。なぜって、遠藤さんは砂地フェチだから。彼が気に入って潜るポイントが、島の南端にあるベリ

リリュー島、アンガウル島では珍しい水深30mの広い砂地、サンドガーデン。いわく、「パラオでも一番の癒し系砂地ポイント、深いけど」とのこと。

ここもデイドリームオリジナルポイント。広々とした砂地ではときにシルバーチップの目撃例もある。透明度も高く、広々とした明るい砂地は、水深30mということをついつい忘れてしまいそうになる。

この砂地を満喫した後は、少し島寄りに移動して、サングのPATCHリーフをさらに浅瀬へと進んでいくと、コモンシコ

ロサングの大群落に行き当たる。座間味のブツブツサングや、瀬底島のコモンシコロサングよりも規模的にはかなり大きい。この大群落は水深25mから、12mまでのゆるやかなスロープ状に広がっている。ここでは、巨大なアオウミガメが眠っていたり、根のトップにはアカネハナゴイ、パートレットアンティアス、ソメワケミナミハナダイ、ハナダイダマシなどが優しく群れていて、見る者の心を更に癒してくれる。

あれだけのハナダイが密集しているのは、かなり珍しいこと。フィッシュアイでも十分に撮影が楽しめた。

水深30m、白砂の海底、サンドガーデン

01/ サンドガーデンは、広々とした砂地が広がる、癒し空間。ちょっと深いけど
02/ 太陽光の差し込む幻想的な空間



01

LukesII & AnthiasII



02

一発狙いのルーカスII & マクロの宝庫アンティアスII



03

LukesII & AnthiasII



04

01/ルーカスIIで遭遇した、シルバーチップ(下) 02/アンティアスIIで見れるアオマスク
03/アケボノハゼもペアで撮影できる 04/カラフルで絵になるバックグラウンドがそろっている

一発狙いのルーカスII & マクロの宝庫アンティアスII

最後に紹介するのが、ルーカス。ここも、デイドリーム
のオリジナルポイントといってもいい。ペリリュー
とアンガウルの間にある巨大な隠れ根で、ポイントとして
は、I~Vまで作って、一番潜っているのがII。

「シルバーチップシャークを狙って高確率で見せるの
は、アンガウル、それに北のカヤンゲル、そしてこのルーカ
スだけ」。

過去には、タイガーシャークやジンベエザメとの遭遇もある、
超一発狙いのポイントだ。

シルバーチップについてもまだまだ調査中だが、スロー
プのドロップオフの35m~40mぐらいでの目撃情報が多い
とか。「意識しているのは、エントリー時のドボンという音。

この音に反応して上がってくることが多いので、エントリー
ポイントを気にしながら潜る。エントリーと同時に11匹もの
シルバーが上がってきたこともあるんです」と遠藤さん。シ
ルバーは見たいけど11匹ってのはちょっと緊張するな。

もう一つのアンティアスIIは前回、ハナダイ系を特
集したけど、ハナダイだけでなく、多くのマクロ生
物の撮影に適したポイントだ。それだけでなく、自分はこの
ポイントで過去に2回、カジキに遭遇している。

エクスプレス、コーナーでの激しいダイビングをした後に、
まったりマクロを楽しんで、そして安全停止中には、もしか
してカジキになんてことも想像しながら潜るのも悪くない。



シルバーチップシャーク



- 01/深場に生息するコウリン
ハナダイ
- 02/メガネゴンベ。ドロップ
オフを移動するダイバーのバ
ブルをバックに撮影
- 03/アオマスクの若魚
- 04/ヘルフリッチのペア
- 05/オオテンハナゴイ
- 06/クダゴンベ
- 07/フグの幼魚

一発狙いのルーカスII
&
マクロの宝庫
アンティアスII



初めて訪れたのになぜか懐かしい感じがする場所…それがこの島の第一印象でした。

約二週間の滞在、日本の寒い冬から逃れて南の島に遊びに来ることは、水遊びが大好きな子供にとってはたまらないらしい。長男・海友(カイト)はすぐに島に馴染んでしまいました。港に行けば泳いだり、海に石を投げたり…、舗装されていないでこぼこ道の水たまりを見つけては嬉しそうに飛び込んでいく。「ママ～ぬれちゃった～」と言いながら、気づくと洋服を脱いで裸になって遊んでいます。最初はまめに着替えさせていたけど、だんだん面倒になり「すぐにまた濡れるしこのままでいいや」と、親もすっかり島の生活を理由に適当になっていくのです。

パラオでは年配の方は日本語を話すことができたり、パラオ語のなかにも日本語の単語がそのまま使われていたり

して、ちょっとした会話の中でも面白い発見があったりします。海友がペリリュウで一番仲がいいお友達の名前は「イチロー」、もちろんパラオ人です。その従兄の名前は「ニロー」。どうやら日本の名前の「ジロー」がなまって(!?)しまったらしい。(笑)

滞在先の隣のおじさんは、裸で楽しそうに走りまわる子供たちをみながら、いつも「カイトっさ～ん! ハヤトっさ～ん! ノ～バンティ～、ノ～もんだ～い!」と英語と日本語のまじった言葉で声をかけてくれ、ニコニコ手をふってくれます。

好奇心旺盛な子供にとって、こんなに魅力的な環境で部屋に大人しくしていられるはずもなく、…朝起きると隣に寝ているはずの海友がない。あわてて外に探していくと、隣の家の子供と一緒に、おばあちゃんから朝食のラーメンをもらって夢中で食べていたということもありました。

島の人達はいつも温かく私達家族を迎えてくれます。とくに海友は有名人(!?)で、4度目となる今回は、海友が自転車で嬉しそうに島中を走り回っていると、あちこちから「カイト～! カイト～」という子供達の声がかえってきました。私と二男の颯友(ハヤト)がのんびりとお散歩していると、何も聞かなくてもみんなが「海友はいまあそこで遊んでいるよ」とか「あっちにいったよ」とか教えてくれます。まだまだ観光化の進んでいないのんびりした小さな島に毎年きて、嬉しそうに走り回っている小さな外国の子供が面白いのかもしれない。

颯友がまだ寝たきりの赤ちゃんだった頃。いつものように一人で外に出ていく海友をほっておくわけにもいなかったので、その度にまだ小さな颯友を抱っこして海友を探していくと、いつも島の子供達と一緒に楽しそうに遊んでいま

した。そんな私の様子をみていた島の人がこんな言葉をかけてくれました。

「ここでは大きい子が小さい子を見ていて、それをまわりにいる大人みんなでみているんだよ。島民みんなで子育てをしているんだ。だから赤ちゃんと部屋に戻って大丈夫だよ。」

温かくてやさしい人のいる島……気づくとまた、この島に戻って来てしまうのは、島の人たちのこんな優しさのせいだと思います。子供たちが成長していく過程のなかで、島の人たちや空気に触れ、島の生活を体験できることは本当に貴重で幸せなことだと思い、感謝の気持ちでいっぱいです。



毎年家族で訪れているペリリュウ島 文：越智充奈子



01/ 隣の家でパラワンナツの皮むきを手伝う息子たち

02/ お兄ちゃんたちに混じって、野球を教えてもらう海友

03/ 道にできた泥の水たまりで島の子供たちと遊ぶ

海に沈む夕日を眺めながら過ごす幸せ

Palau. PELELIU Island
Web-lue 2009. Autumn



Information Link
<http://www.daydream.to/peleliu/>

click! 関連情報HPへ



Information デイドリーム ペリリューステーション



Voice



ハイレベルな海でもある、ペリリューにおいて、もう少し色々な層のダイバーの人たちに、安全に潜ってもらいたいというのが今後のテーマ。自分たちがカバーできる範囲で、コース取りなど色々方法があるのではないかと思います。例えば、流れによって群れが上がってくるとか、様々なデータを蓄積して、今のスタイルを磨き上げていけば、色々な人に、より安全にペリリューの海を楽しんでもらえると確信しています。

デイドリームペリリューステーションマネージャーガイド
遠藤 学さん

常に、前向きに多くのダイバーがいかにも楽しめるかを考えて日々努力を続ける姿勢には、好感が持てる。多くのリピーターがいることでも、ペリリューの海の魅力そのもの、そしてデイドリームペリリューステーションの「海を魅せる」努力がいかにも多くのダイバーに評価されているのが伺える。

決して簡単な海ではないことは潜りに行けば一目瞭然。そこでガイドをするのは本当に大変なことだ。だから、ガイドの質と姿勢が問われるペリリューの海での、彼らの今後の活躍を見守っていきたい。

Present



デイドリームペリリューステーションのTシャツをプレゼントします。お問い合わせよりご連絡ください。